
ガリア戦記

カルネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガリア戦記

【Nコード】

N3447D

【作者名】

カルネ

【あらすじ】

辛いことばかりの道にそれでも立ち続けたのは、誰かを守れる自分になりたかったからなんだ。

プロローグ（前書き）

某歴史上の人物が書いた本と同じ名前なのですが、そちらとはまったく関係ありません。ちなみにガリアは今のフランスのことだそうです。

ブローグ

ブローグ

もうずっと前の話だ。

大きな、大きな戦があった。

たくさんの人が死んだ。本当にたくさんの人が死んでしまった。
たった一人の男のために。

今でも覚えてる。

夜のうちに降り積もった雪が鮮血に染まっていた光景を。

武器を持った兵士だけじゃない。

幼い子供、老人、女性。鍛えられた殺意の前には無力な者達の死
体の山。

一面の白の上に広げられた紅。
気が狂いそうだった。

自分が守れなかったもの。守りたかったもの。

その全ての前に自分というものは無力で、小さくて。

堪えた嗚咽が砕けそうな胸を疼かせた。

強くなることの意味を知らなかった甘い自分への苛立ちとなくし

たものへの悲しみと。

その日、胸のなかに刻まれた想いを自分は決して忘れない。

第1話『ある男女の話』（前書き）

続きをすぐに出すつもりでプロローグを投稿してすぐ書き出したもののなのですが、すぐく時間が掛かってしまいました。プロローグと重ねて考えると少々違和感があると思いますが、読んでくださったら嬉しいです。それではどうぞ。

第1話『ある男女の話』

私には大切なものが何もなかった。

大切だ、ということが私にはわからなかったからだ。

日常はいつも同じ事の繰り返しで、現実というものに然したる興味が無かった。

ある日、いつもと変わったことが起こった。

私は奴隷として売られることになっていた。奴隷商人に私を売ったのは他でもない父だ。

父は私が知らない子なのだ、と言って何度も何度も叩いた。

声を上げるともつとひどくなるから、私は下唇を噛んで声を出さないように我慢した。

母はいつも父の後ろで私を冷えた目で見つめた。何かを言うわけでも止めようとするわけでもなく。

私には父にも母にもまったく似ず、大きすぎる董色の瞳にくすんだ薄茶色の髪だった。要するに、父と母には私の姿が醜く映ったのである。

本当はそれだけじゃない。父と母が私を売ったのには他にも理由があった。

私に人の未来と過去が見えたからだ。

私は母が父ではない人との間に作った子供。二人いる妹とは半分しか血は繋がっていない。半分繋がっていても私には未来も過去も見えた。妹たちには見えなかった。

これらが指すところには、母が浮気をして生まれた不義の子だということだ。

父も母も貴族階級出身で、スキャンダルを恐れた。と、同時に気味悪かったのだと思う。

そして、私は売られた。

醜く、気味の悪い子供をだれが買おうか。

私は当然のように安く売り出された。一番最初に売られることになったのだ。

奴隷市場の一番奥まったところに、競りの会場があった。

台の上から見ると人の顔が一斉に私に向いているのがわかった。

私は不思議な気分にとらわれた。

真っすぐ前を見ていると、このまま待っていれば誰かが助けられる、と未来を見ずともわかった。

5・4・3・2・1……

0で目を瞑り、耳を押さえてしゃがんだ。耳を塞いでも痛くないような大きな爆音が聞こえた。

その後、見えた通り私の頭上を柱の木片が飛んでいき、奴隷商人に当たって砕けた。

もう自分のところには何も危険なものは飛んでこないとわかったから、私はすつく、と立ち上がり、重い足枷と手枷を引きずりながら出口へと向かった。まったく食べていなくて、体力は限界だった。

その時。

私のところに待ちに待った人があらわれた。その人は、痩せた私の体に残った体力と気力が、どれほどのものか、わかったのだと思う。

力強い腕が腰に差していた剣を抜き取り、手と足両方の鎖を切り取った。剣を鞘に戻した後、その人は私を軽々と抱き上げ、爆撃のために散らかった会場内をすいすいと、軽やかに抜けていった。

私は抱き上げられた腕のなかで、朦朧とした意識を回復しようとしたが、すぐ眠りに堕ちていった。

目が覚めたとき、その部屋には誰もいなかった。

私は軋むような痛みを訴える体に鞭を打ち、然程遠くもないはずの出入口へと懸命に足を動かした。

出入口の布の下を潜り抜け外へ出ると、そこら辺にいっぱいのレストランが作られてあった。

探していた人もすぐ目の前の焚き火のところで数名と談笑していた。

本当は駆けていきたかったが、体力的に無理だった。覚束ない足取りでその人の方へ向かった。

「だめじゃないの！あなたが一番衰弱していたのよ。」

大きな声で私を呼び止めた人は、恰幅が良く、あつたかくてやさしそうなお母さんという感じがした。

「私は大丈夫です。」

本当は話をすることさえまならないほどだったが、どうしても言わなければならなかった。

自らの使命とも言えることを果たすために、力を振り絞ってあの人の方へ振り返った。

あの人は女性と私のやりとりを静かに見守っていたようだった。私はその人の目を、有りつたけの思いをこめて見つめた。

「東の方から、奴隷商人の一団が雇った傭兵達が、近づいています。奪われた十二名の奴隷の中に、貴族の家に高値で売るはずだった、柳憐がいるからです。傭兵達の数は三十七名。二時間後にはここに到着します。戦いは避けられないでしょう。」

痛みと体調の悪さを堪えながら、意識を集中して、見えたものをその人に伝えた。信じないかもしれない、と思いながらも、この人ならばと一縷の望みを捨てきれなかった。

「どこでそれを。」

咎めるわけでもなく、その人は静かに問う。

私はそれに答えたいと思いつつも、すでに限界に達していた体は力を失い、その場に倒れこんだ。

地面に衝突する前に、暖かな腕が私を抱き留め、ふわりと抱き上げてベットに寝かせたようだった。

私が再び目を覚ましたのは、それからずいぶん時間の経った夕方の頃だった。

柔らかなベットの中で暫し自分を取り戻すのに時間を要したが、声をかけられて一気に目が覚めた。

「…なぜ、ここに？」

喉が乾いてひどくしゃがれた声しかでない。

「君がいったことは事実だったようだ。確かに、傭兵を送り込んで来たよ。」

手に持っていた厚い本を、私が横たわるベットの横に置いた。ベットの端に腰掛けて私の額をそつと撫でやさしく微笑んだ。

「疲れただろう。もう少しお休み。」

その声が不思議なほど心の中に染み込んで、私はほつと息を吐いた。

「あら、めずらしい。あなたがそんなに考え込んでいるなんて。」

女の手入れされた美しい手が肩に掛かる。

「私が何も考えていないとも？」

明らかに冗談とわかる口調で囁いた。

「そうじゃないけど。」

女は冗談だと思ったようだ。

男はそんな女を、穏やかに微笑んでいる表情とは裏腹に、冷めた瞳で見つめた。

女は高級娼婦であり、男は客だった。何度か足を運んだだけだというのに、女は男をさも理解しているように言う。

男は嫌悪を抱く自分のことを嫌悪していた。罪の無い女に八つ当たりしようとしたことにも。

男の頭からある光景が離れなかった。

倒れてしまった少女が言った通り、傭兵は二時間後にやってきた。男には造作もないような弱い連中だった。

男は自分の傲慢さを自覚していた。だからこそ、少女の純粋な瞳を捉えたとき、目が離せなかった。

少女のあの瞳に見つめられるにはあまりにも自分は汚く、あまりにも世慣れていた。汚さの中に染まっていた。

男はあの瞳に恥じないようになりたいと思った。わけもなく。唐突に。

「すまないが、もう帰らせてもらう。」

男は迷いの無いしつかりした声で女を跳ね除けた。

「ちよっ、ちよっと！」

女の声に振り向く気はさらさら無く、さっさと部屋を出てしまった。

あの女は自分の美貌と手練手管に掛かれば、どんなに恋人に心奪われている男でも、簡単に自分の言うことを聞くと思っているのだ。男は女のそういうところが気に入らず、会っても月が真上に昇る頃には帰ってしまう。本当は仕事でなければこんなところに来たく

なかった。

まだ真上にも達していない少し欠けた月。

その美しさの中には隠しきれない淋しさと、太陽に対する思慕を感じた。どんなに会いたくとも会えない二人。

月に重なる人の面影が、ひどく男の胸を苛んだが、男はそれが何であるのか知らなかった。

男はそれを知りたくもあり、知らなくてもよいとも思った。

嘘も真もそれを知りたいと思う人の影の中にしか現れないというのに。

男はただ思った。真実は月の形をしていると……――

どんなときでも決してそれに当てはまらない人がいるものだ。

私の場合は決して私を地位というもので見ない人だった。

経済的なものはただ跡を継いだけだし、身分というものも親から子へ受け継がれていくものだ。

自分の恵まれた境遇に感謝すべきだというのに、幼かった私はただ身分というものが煩わしく、何かをしたいという衝動に身をまかせ、同じように変革を望む若者とともに沢山のことをした。領主を弾劾したり、反乱の手助けをしたり。

それは確かに充実した日々だった。表だって何かをするわけではない。しかし、何かをしているという実感があつた。

そんな日々の中でふと虚しさが胸の中を過つた。

私はそんなとき、本を手取るようになった。どんな本でもいい。簡単なものでも難しいものでもよかった。

知識に没頭し、現実を暫し忘れることが必要だったのだ。

立場というものに甘んじ、人に頼っていたあの頃よりも本を読んだ。

思えば、全てはいまに必要な大切な布石だったのではないか。そう思えてならない。全ては運命だったのだ。

自分もまた、領主として人を治めるということに携わりはじめ、人のことを考えるようになった。

何にもかえられない大切なものもできた。

執務机からふと窓の外を見た。

思わず顔が綻んでしまうほどの春。

領地のあちこちに植えられた樹木の薄桃色の花びらが美しい絨毯を作る。

領主として迎える百度目の春だった。

第2話『朱麗』

北に六山、南に嬰都、西に大河、東に広大な高原が広がる大地の恵みに恵まれた場所。それを、麗州と言う。

大陸で最も古く、最も神秘を秘めた麗州。太古よりその地を治めてきた何百代もの領主の裔、現在の主人の名を朱麗と言った。

母の名は麗藍。父の名は朱麗は知らなかった。もとより、彼らの一族は婚姻による血の存続を示さない。つまり、領主が認めたものが跡を継ぐことになる。能力そのものにしか人の価値は示されないと考える特徴を持つ一族であった。

もっとも、朱麗の母は前領主。その前の領主は朱麗の母の父なのだから、大抵は血の繋がった者に継がれている。

その麗州でかつて無いほどの大事件が息を潜めているなど、いったい誰が知ることができただろう。

朱麗の統治から百度目の春が来た。

風に揺られて散ってきている桜の花びらが作る桃色の絨毯の上、見知った金色の後ろ姿に思わず顔が綻ぶ。

百回のどの春も朱麗には同様に美しく映った。独りではなかったから。

朱麗は少し遠くに見える金色の後ろ姿の人と、母親から譲り受けたこの屋敷でともに暮らしていた。

その人の名は桜花。

朱麗にとつてとても大切な人だった。時に友となり、姉となり、恋人のようでもある不思議な女だった。

「桜花。お茶にしないか。」

普通に話し掛けると聞こえていたようで振り返って微かに微笑んだ。それはいつ見ても不思議な光景で、どんな風に聞こえているのだろう、と朱麗は思わないでもなかったが、どうでもいいことでもあった。どのみち桜花であることにかわりはないのだから。

午後の一時に、木陰にティーセットを運び込んでゆっくりとお茶を啜る。

二人きりの時はいつもそこには居心地のいい沈黙がある。朱麗が大切にしている時間の一つだ。

いつもは無愛想な顔ばかりする桜花も、この時ばかりは薄く微笑んでいる。美しいと思った。木漏れ日を浴びてときどきキラキラ輝く人の微笑みが。

こんなにも穏やかな日々を送るたびに朱麗はただ願った。

この穏やかな日々が長く続くことを。人々が幸福であることを。それは名誉や富を大事にする人には些細なことなのかもしれない。けれど、本当に人に必要なものだから。

ただ、領地を守ることしかできない自分。

朱麗は無力なる自らを感じながら、祈り続けた。

この世界のために。

第3話『桜花（1）』（前書き）

登場人物の読み仮名を書いていなかったなので、ここに書くつもりです。
朱麗しゅれい桜花おうか仁じん胡芙蓉ふようきん芹星せいりゅう龍毅りゅうぎです。

第3話『桜花（1）』

その日は朝から騒々しかった。

「ねえ、そっちに行つてない?！」

「何が?」

その日は朝から騒々しく、普段は静かな館の中も人々の声や足音が響いていた。

「やっぱり、当日ともなれば騒々しいわね。」

そう気だるげに言ったのは、豊かな赤い髪を無造作に纏めあげた女だ。

「そりゃ、記念すべき百周年記念式典があるんだぜ。お祭騒ぎにもなるさ。」

と、ボサボサの砂色の髪にバンダナを付けた男が呆れたように答えた。

「あんたは何かしなくていいの? またあの子に嫌味言われるわよ。」
ぎくつと体を震わせる男に女は隠さず笑った。

「ああゝ……、なんとかなる？」

「さあ？あんたが自分の仕事やればいいだけだろうけど。」

「そんなあゝ……。あの女苦手なんだよ。」

武道に優れる男の何とも情けない様子に笑いが止まらない。赤い髪（髪）の女、もとい、芙蓉は楽しくて仕方がなかった。

「きちんと仕事をしてればそんなことにはならないはずだろう？」

苦く歪んでいく男の顔を好勝手にいじめていけば、穏やかな男の声がかかった。

「朱麗ゝ……。領主さまの優しさを俺に示したっていいだろ？」

男のどこか懇願じみた気やすい口調に、朱麗は目を細めた。

「仁胡。私は、桜花に睨まれる愚は犯したくない。」

いっそ、清々しいほどきっぱりした口調。

「たしかに。関わらないのが身のためだわ。」

芙蓉の同意は、見た目にそぐわない仁胡の少しばかり傷つきやすい心を傷つけた。

「あら、いじけちゃったわ。」

しゃがみこんでぶつぶつといじけてるのは無視するに限る。何げ

に朱麗はひどい男だったりする。

「話は変わるが、桜花を見なかったか？」

本当に無視するのね…

「さっき、芹星と一緒に中庭に行つたみたいよ。」

「そうかありがとう。」

「どういたしまして。」

心なしか足取りの軽い男の後ろ姿を見て、

「ああじゃなければ立候補するのに……」

何にとは言わないが、芙蓉は誰にともなく呟いた。

「いい加減に泣き止んだらどうです？ 芹星。」

領主の館は執務を行なう役所と、普通に生活する母屋にわかれており、桜花と芹星がいるのはその間にある中庭だった。

「……だって、…ヒック、…誰も、……誰も私の言うこと聞いてくれないんです……」

しゃくり上げながら一生懸命桜花に訴える芹星は可愛いのだが、

さすがに疲れるものがあつた。

桜花の無表情な顔は、芹星のことをとても可愛がっていると自覚していたから、少しばかり心配そうに歪む。

「強気で挑めばわかつてくださると思いますよ。」

「きつと！きつと、止めてくれません！だって、龍毅は……龍毅は……私のこと好だって……言ってみましたから……」

顔を真つ赤にして言う姿は確かに可愛いのだが、どこか憎らしい。

はぁ、とため息を一つついて、相談にのるのも師匠の務めなのかと諦めた。

「あなたはこう思っているの？」

純粋な興味と親心とも言うべき優しさを以て桜花は問い掛けた。

「……………」

「黙っていてはわからないわ。」

芹星は桜花がたった一人弟子にした、才能溢れる子だった。大切に思っている子の役に立ちたいとも思うが、これは当人の問題だとも思う。桜花はどうするべきか悩んでいた。

「………… お師匠様は、朱麗様をどう思っているのですか…………？」

目も顔も真つ赤にして一生懸命に話す芹星のか細い声が、どこか昔の自分を思い起こして少しだけ笑った。

「私は芹星が副官のことをどう思っているのか聞きたかったのだけれど、言えないみたいね。」

「……………」

「まあ、いいんですよ。答えられなくても。少し長くなるけど昔話を聞いてくれますか？」

「……………」

無言でこくり、と一つ頷いて。

遠いあの時を思い出しながら、桜花はゆっくりと話し始めた……

私が朱麗様に初めて会ったのは今から百二十年ほど前のことでした。

その当時の私は、人は皆同じように私を気味が悪いと遠ざけるものだと思っていました。

私の体は十二才だと思えないほどガリガリでしたし、目ばかり大きい上に髪は中途半端な薄茶色。

目だけが爛々としていて、異様でしたから。

朱麗様は反対に、健康的な象牙色の肌に髪は真っ黒く艶々していて、それは近寄りがたく思ったものです。

朱麗様の周りには常に仁胡や芙蓉みたいな側近が傍にいましたし、私みたいなのが近付けるような人ではないって、正反対だと思っていました。

私は暗い道を行き、あの人は明るい道を歩んできたのだと思っていました。

ある日、朱麗様は私のもとにやってきました。

いくら汚れを落としてきちんとした服を着ていても、私には自分がひどくみすばらしく思えて、私は朱麗様からできるだけ体を離して座りました。

私も一応は女としての自覚がありましたから。

私を真つすぐ見て丁寧に話した朱麗様の話を要約すると、私についてきてほしい、とのことでした。

私はすぐには答えられませんでした。

私の能力は確かに役に立つでしょう。しかし、朱麗様はその能力がほしくて私についてきてほしいなどと言ったわけではないことは聞かなくてもわかりました。

ではなぜ？

私の中でいくつもの可能性が頭の中で浮かんでは消え、浮かんでは消えていきました。

一瞬、朱麗様は私の目を強く見つめました。

私は見入られたようにその瞳から目を離せず、彼がとても近くまで体を進めていたことにも気付きませんでした。

「私はいつか、自分の故郷に帰って人々が幸福に暮らせるよう、私の全てをかけて民を治める領主になる。そのために、私には一人でも多くの信じられる仲間が必要だ。」

然るべきその時に私の傍で私を補佐してくれないだろうか。」

一瞬、頭の中が真っ白になりました。浮かび上がった疑問は一つ消えましたが、また、何故？という想いが出てきました。

「どうして……」

私の声は擦れ体は震えていました。私の頭の中は期待と不安と、少しの恐れでぐちゃぐちゃになっていました。

「……いやか？」

いやだとかいやじゃないだとか、私には選ぶことができませんでした。ついていけば、飢えることも寒さに震えることもなく暮らすことができるでしょう。しかし、そこが私の居場所になるかなんて時が来なければわからないのですから不安だったのです。

私はただ黙っていました。何も言うことができなかったのです。

「……………いやなら首を振って。振らないなら承諾したととるよ。」

朱麗様は言っていることは少し冷たく思えても声は暖かくて優しくかった。

だからか、私は俯いた顔を上げて真っすぐに朱麗様の目を見ることができたのです。

朱麗様は微かに微笑んで、そつと、私の頭を撫でました。

そして、たった一言。

ありがとう、と。

そのたった一言が私の宝物になったのです。

初めの頃は何の知識も私には無く、朱麗様に字を教わって書物を読んでみたりして、知識を貯えていきました。書物から学べることも確かにありましたが、実際に体験することが一番大切なのだと知りました。

学問も勿論のこと、武術においても私は朱麗様を師として、力を付けていきました。

同時に、私は自らのある能力に気付いたのです。

ある日のことでした。

*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3447d/>

ガリア戦記

2010年10月15日17時44分発行